

健康教育[®]

— 健康なくして教育はありえない —

◎ 今、「普通の子供達が危ない」…… 正司 昌子
～子供達におこっている異変～

◎ 人としての“根”を育てる …………… 岡 健
～子どもへの大人の責任～



「健康教育」[®]

——健康なくして教育はありえない——

1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。



薬学博士・河合亀太郎

こどもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目 次

3	今、「普通の子供達が危ない」 ～子供達におこっている異変～
9	人としての“根”を育てる ～子どもへの大人の責任～
15	あらまし

今、「普通の子供達が危ない」 ～子供達におこっている異変～

レクタス教育研究所
理事長

正司 昌子



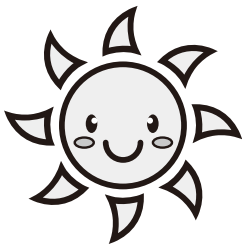
太陽を見たことがない少年

「今日はよいお天気です。間違っているところに×を付けてください。」

7～8年前、小学校受験間近のA君に影が出来る場所の間違い探しをするプリントを出した時のことである。

プリントには、木や建物、人物の影が描かれ、その中に太陽との関係で間違った影が混ぜてある。

A君が答えられないので、問題の意味が理解出来なかったのかと思い、「よいお天気ってどこでわかるの?」と聞いたが解らない。プリントに描かれた「太陽」と「よいお天気」という事が結びつかないのだ。太陽の絵を指して、「これ、何?」と聞くと、大声で「電気!」と答えたのだ。思わず、耳を疑ってしまったが、「空に電気がついているのかな。」と聞くと、黙ってしまった。そして、「星かな?」と聞くと首を横に振った。「じゃ、月かな?」と聞くと、我が意を得たり、とばかりに「うん、月、月」と言ったので、「月って昼に出ているの?」と聞くと、また黙ってしまった。そこで、「これ太陽だよ、お



日様って見たことあるでしょう?」と言うと、なんとA君は「見たことない。」と答えたのだ。何回も聞きなおしたが、本当に一度も見たことがないようだった。特に問題のない普通の幼稚園児である。

私が0歳から小学校3年生くらいまでの子供を対象に全人教育を基本とした幼児の能力開発の教室「レクタス教育研究所」を始めから、30年近く経つ。その間に、700人ほどの子供達と接してきた。希望者は誰でも入学可能。受験に偏らず、マンツーマンで個々の子供が持っている資質を見つけて伸ばすこと、同時に問題を抱えている子供の早期発見と改善に尽くしてきたつもりである。

この様に、長年幼児教育に携わり、滅多なことでは動じない私でも、ついに、「太陽を見たことがない子供」が出現した時にはびっくりした。この様に、最近の子供には驚かされることが多々ある。10年前に月を一度も見たことがない年長児が現れた時にも驚いた。星を見たことがない子供も半数近くいる。

「朝日新聞」はある年から「生まれてから一度も朝日や夕日を見たことがない、小・中学生」という記事を毎年掲載しているが、それによると、「2000年には23%、2007年には、ついに50%を越し、53%になった」と報じている。

絵にも異変が (四角い川、丸い川)

子供の絵にも、驚かされることが多い。

川の絵を描かすと、画面一杯に長四角を描き、水色で塗り潰して「川は四角い」と言い張る有名私立小の男の子。10年前の出来事である。

その半年後には、水色の丸い玉が、輪のように並んだ、どうみても、川に見えない川の絵を描いた女の子が出た。

これこそ、例外かと思ったが、その後、四角や、丸い川は増え続け、流れている川が描ける子供の方が少なくなってしまった。そればかりではない。それらの絵を見て、大人には川と見えない川を3～4歳の子供が「川」と言ったのだ。

ショックを受けた。橋に至っては、空中に架かっていたり、水中に浮かんでいたり、川と平行だったり、これも年々増えている。

当初、これは都会化された阪神間の子供特有の現象だと思っていたが、都会化の進んでいない北九州と大阪郊外の小学校の先生の協力を得て、1年生の1クラスずつに描いてもらった川の絵にも、円や四角い川、空中に浮く橋など、阪神間の子供とそっくりの作品があり、こういう現象は全国区になっているようだ。



『手』がないヒトの絵

7年程前、突然、両手を描かない子供が沢山現れた時もびっくりした。それより5～6年前に、ある年長の男の子の母親から「子供が絵の時間に両手のない人間を描いたので、先生に呼び出され、家で手を使わせていないからではないかと注意を受けたが、どうしたらよいか？」と相談されたことがあったので、それ以来、子供の絵を注意して見ていたが、片手しか描かない子供が1人出ただけだった。

結局、その年は、半数位の子供が、1回は両手がない絵を描いた。活発な子と、大人しい子、成績とも関係なし。

飛び箱十段跳べる子が自分が飛び箱を飛び瞬間を描いた絵は、腕がないので、空中に斜めに浮いているようだった。髪をカールしヒラヒラのエプロンをつけた母親が水道の蛇口、冷蔵庫、ガスレンジの整った台所で、フルーツ、野菜、包丁まで描かれたキッチン台の前に立っているのに腕はない。独楽を回している男の子は、腕がないので、紐がおへその辺りにくっついている。丸い顔の下にキリンのような長い首、四角や三角の胴体、しかし、どの絵にも腕はない。

作家の藤原智美氏が、この現象に興味をもたれ、当教室での取材をもとに『何故、その子供は腕のない絵を描いたのか。』（祥伝社）という本を書かれた。

藤原氏は、顔と三角や四角の胴体だけの人物画を「積み木人間」と名づけ、子供たちの深層心理に何かが起こっていると警鐘を鳴らされた。藤原氏は「やがて手も足もない絵を描く子が出てくる」といわれたが、予想より早くあっという間に手足のない絵が増え、手足さえない、首だけで胴のない絵も出て来た。家族で散歩しているところという絵を描いた6歳の子は、絵の下の方にきれいな花が描か

れ、家族3人の顔だけが空中に浮かんでいる。友達と遊んでいる所を描いた女の子の絵は丁寧にコンセントやコードが描かれたホットカーペットの上に、顔だけが2つ転がったように描かれている。

しかしこれだけでは終わらなかった。それから1年もたたない間に、まがりなりにも登場していた人間が消えてしまった。「今日一番楽しかったことは劇の練習」という絵は、マイクだけが立っている。「大きくなったらなりたいもの」という絵を描かせたら、以前は必ず自分がケーキを売っているところ、自分が聴診器を持っている所というように、「自分という人間」を描くのが当たり前だったのに、お花だけ、ケーキだけというようになってしまった。

こういう変化に最初は違和感をもっていたが、今では見慣れて何とも感じなくなっている自分に気付き、愕然とすることがある。慣れてしまって気にもとめない分、事態は進んでいるのではないか。

崩壊する子供達の日本語

子供達の異変は絵だけではない。子供の語彙の貧困さも深刻になっている。その年令で当然知っている筈の言葉が分からないのだ。

幼稚園年長のMちゃん、お皿におはじきを5つのせ「これいくつ?」と聞くと答えられない。数がわからないのかと、一緒に「いち、に、さん…」と言っていくときちゃんと数えられる。そこでもう一度「いくつ?」と聞くと下を向いて黙ってしまう。ここではじめて「あっ、いくつ」という言葉の意味がわからないのだと気付く。

7年前、はじめて「いくつ?」がわからない子供に出会った時はびっくりしたが、それ以来よく会うようになった。はっきりした数値はわ

からないが、幼稚園児の2~3割はいると思われる。小学1年生でもわからない子供がいる。

ビー玉を右手に3個、左手に5個のせ、「どっちが多い?」と聞いても答えられない子供がいる。この場合「どっち?」「多い」のどちらかの意味がわからないのだ。両方わからない子もいる。他にも「まん中」「多い方、少ない方」「上、下」「縦、横」「遠い、近い」となり、反対、囲む、あげるともらうの区別など。

また「ここ」「それ」「どれ」といった指示代名詞も難物だ。「ここに置いて下さい」と言って机の上をトントンとたたいているのに、どこに置くのかわからず、キョロキョロしている子供は年長児の半分位いる。あまり簡単な言葉がわからないので見つけるのも、教えるのも大変だ。

1つ、2つ、3つ…という数え方もわからない。10年位前、大手塾の模試で常にトップクラスの成績をとっているD君が、長文の記憶問題の答案を白紙で出したので、何が原因かはっきりさせるため、再度問題をゆっくり読み上げていくと、「りすがどんぐりを3つ拾って」という所でD君が「先生! みつつって何ですか?」と聞いたのだ。ショックだった。幼稚園年長児にもなって「3つ」が分からない子供がいるなど、当時は想像できなかったのだ。

D君は日頃はよく出来るので、分からない言葉に出会って動揺し、全く答えが書けなかったということがわかった。

それ以来、年中児に序数を教えているが、10年前は教えなくても「ひとつ、ふたつ…とお」までいえる子が2~3割いたが、年々減少し、今では1~2割いるかいけないかだ。実数との対応はもっと難しい。親子の会話にこうした言葉が使われていないのだろう。

劣っているのは語彙だけではない。話す力、文章を作る力も落ちている。

聞く力の低下

言葉は聞くことから始まるので、当然の事だが、聞く力も低下し続けている。数年前ある中学の先生の講演会で聞いた話である。

先生が「今日は35ページから始めるから35ページを開けなさい」といっても誰も開けない。1人の生徒が「先生、何ページからですか?」と聞くので「35ページだ。ちゃんと聞いておきなさい」と答えると、間を置かず別の生徒が次々と「何ページですか」「何ページですか」と聞くので、なかなか授業が始められない。これと同じ話を、他の中学の先生からも聞いた。この話を聞いたとき「うちの教室の5、6歳児と同じだ」と思った。教室ではトップクラスの生徒でも、先生の話が聞けない。そういう子供が増え続けている。

中学生といえば12歳から15歳。うちの生徒より7歳から10歳くらい上で、そこにいくまでに様々な経験をしているはずだが、それでも人の話を聞く姿勢が出来ていない。その間に練習が出来なかったのだ。

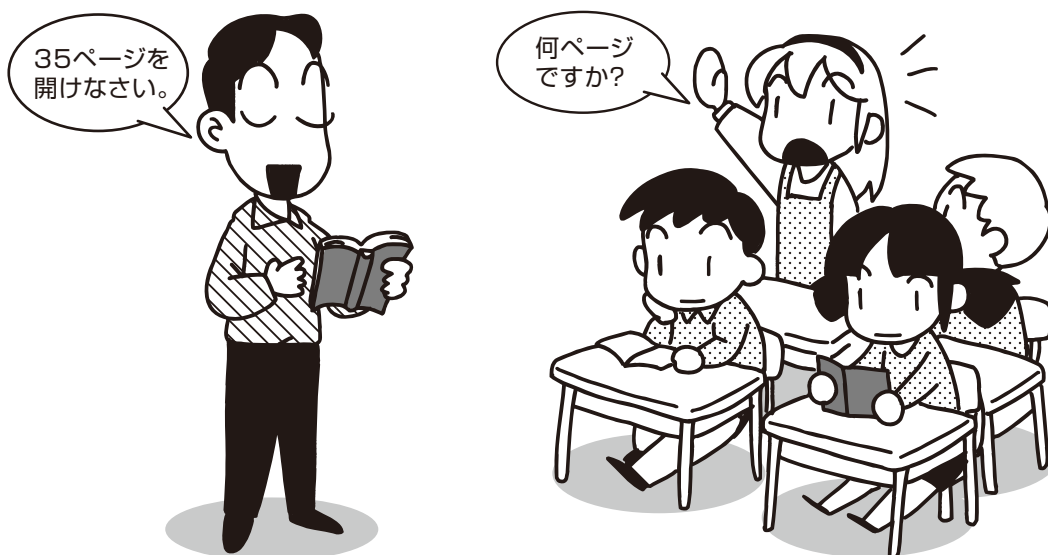
音は自然に耳に入ってくるが、その中から必要なものを選択して聞き分けるためには訓

練がいる。一昔前まではその訓練が自然に出来るシステムが働いていたので、誰でも母国語である日本語を努力せずに修得出来た。

一世を風靡した鈴木式ヴァイオリンの鈴木慎一郎氏は、日本人なら誰でも日本語を修得できるその自然のシステムに気付き、この方法でやれば誰でもヴァイオリンが弾けるようになる」と鈴木式を編み出されたのである。しかしその母国語獲得の自然なシステムが、急激な文明の進歩の副作用として崩壊した。ところが、あまりに自然なシステムであったため、誰もその存在に気付かず、崩壊した事にも気付かず、防止のための手だてが遅れたことが、聞く力の低下を招いたのではないかと考えている。

母国語獲得のシステムの崩壊

先程の中学生の話も深刻だが、今、幼児にはもっと深刻な問題が起こっている。日本語、つまり母国語の音が聴き分けられない子供が増えているのだ。例えば、「いちご」といった時、意味はわからなくても「い・ち・ご」という



音として聴きとれたら、一応、日本語を聞き取れたことになるのだが、「いちご」と聴きとれない母国語の音韻感応力が落ちた子供がいるのだ。

そういう子供のために少しでも聞く力をつけようと、当教室では「紙の中央に丸を描きましょう」といった簡単文章のテープを作り、絵を描かせるようにしている。殆どの子供は、「チューオー」という言葉を知らないで、「知らない言葉があれば、何々がわかりません、と言って下さい。」とってからテープを回すのだが、10回くらい繰り返して10人中1人位が「チューオー」って何ですか?と聞けるくらいである。一応、言葉として聞き取れたら意味を教えるのだが、聴き取るまでにかかる時間は年々伸びている。

しかし、この現象は、日本だけのことではなかった。

「現在も子供達は単語の音を聞き取る能力を身につけないまま学校にやって来るという事である。読み方の授業を始める前に、子供の音韻感応力、すなわち、単語の中の音を区別したり、覚えたり並べたりする能力のレベルを評価する訓練を教師達が受けるべきである。』『滅びゆく思考力』(J・ハーリー著・西村辨作・新美明夫編訳)

著書は本の中でこの危機を繰り返し訴えている。言葉を音として聞き分ける力が落ちているのはアメリカの方が先だったのだ。(1992年・訳)

赤ちゃんの言葉を聞き取る力を育てるのは、生の人間の声だ。今、その機会が赤ちゃんの周りから坂道を転げ落ちるように、ドンドン減っている。アメリカでこの本が出版されたのは、22年前だ。その後起こった携帯電話の爆発的な普及などを考えると、状況は更に進んでいると思われる。

こういう状況を少しでも改善することを目指し、当教室では、赤ちゃんや、幼児に誰でも

何処でも出来る実況放送を薦めている。

「おはよう、パパだよ。」「あ、黄色いチョウチョが飛んでいる。」「向こうから自転車に乗った男の子が来たよ。」「風が吹いているよ。気持ちいいね。」「目にしたもの、聞いたもの何でも言葉にして伝えるのだ。

数年前、京大の経済研究所所長の西村和雄教授と幼児教育について対談した折、この話をすると、西村教授も「我が子に実況放送をしていた」と言われた。実況放送は語彙を増やし、聞く力もつけ、子供とのコミュニケーションも図れる優れものである。

様々な異変

お皿におはじきを2個乗せ、「これいくつ?」と聞くと「いち・に・2個」と答える子供がいる。

こういう子供は、数を数えることは出来るが、2個のおはじきをパッと見て「2個」の固まりと認識出来ない。こういう傾向のある2〜3歳児の両手に1つずつおはじきを持たせ、「に」と言って同時に2個置くように言っても同時に2個置けない「いち・に」と1個ずつ置いてから「2」と答える。

私共の教室では、0歳児から、数を固まりとして見る遊びを取り入れているが、20年前から数を固まりで認識出来ない子供が増えてきた。

私共の教室は人数が少ないので、ハッキリとしたことはいえないが、重度から軽度までいれると、10人中1〜2人の割合でいるようだ。

数を固まりとして認識出来ない子供と、この遊びをしようとする、極端に嫌がって逃げ回ったり、無視したりするが、大抵の母親は、「我が子が、単にこの遊びが気に入ってない

のだろう、興味がないのだろう。」ぐらいにしか思わない。

3～4歳になり、数が数えられる、数字が読める、数字が書けていれば、親はこの子は数のことはよく分かっている、と思っているので、ぱっと見て「2」と答えられなくても「いち、に、2個」と答えるとその違いが分からず、「2個」と分かっているんだから、我が子は何も問題がないと思ってしまう。

数唱と数の量は同じ数であるが、意味は違う。そのことからしても、数を「固まり」として認識できるかどうかは重要なことなのだ。「固まり」と認識出来ない子供は小学校進学後、ごく簡単な計算もままならないのだ。

「原因は何か」小学校の先生の集まりなどで話しても問題にされず、中には教育熱心な親が過剰に数の勉強をさせ、拒否反応している。子供の無意識の抵抗だ。1～2歳ですでに拒否反応が出る現実とはんでもないことだ、親が子供の先天的に持っている力を奪っているのなら悲劇だと言われたりした。(尤も、現場を見ず、我々が持っている常識から原因を考えるとしたら、この結論も致し方ないことだが。)

しかし、現場で見ていると、それとは質の違う見えない原因があるのではないかと捜し続けた。環境の中にある、重金属か、添加物か、遺伝の問題か、学習障害の一種か?色々な本も読んだが、杉山登志郎氏の本を手にしてやっと原因がハッキリした。

「学習障害(LD)とは、知的な能力に比して、例えば読字・書字・計算など、学習の特定領域に限定した学力の極端な問題を抱えている児童である。計算障害を例に取れば、固まりとしての数のイメージ化が出来ないため、比較的単純な計算もままならないという事が起こる。(以下省略)」『発達障害のこどもたち』(杉山登志郎著・講談社現代新書)とあったのだ。

学習障害の一種、という言葉に抵抗を感じる人はいるだろう。しかし、今までの経験からいうと、万が一、何かの障害・問題・不得手の部分を持っている子供であっても、早期発見、対応が早ければ早いほど症状が軽減されたり、中には殆ど痕跡を留めない程改善される例を沢山見てきた。

特に、この数のケースは、早期発見が可能。しかも、改善の取り組みは特別な技術がなくても家庭で対応出来るケースである。ほかに、数字が書けても読めない子供、数字と数が結びつかない子供もいる。

今まで、言葉や、数に関して述べてきたが、もう1つ重要な意味を持つ図形の認識力のことについて簡単に述べておこう。

図形の認識力、対象物、観察に影響する斜めの線を認識出来ない子供も増えている。

他にも、手の能力、運動能力、コミュニケーション能力などにも問題が生じている。

今、我々は、人類がかつて経験したことのない豊かで便利な生活を享受しているが、その影で静かに進行している副作用には気付かなかった。問題の殆どは、その結果だろう。早く歯止めをかけなければ事態は進む一方だ。そのためには現状を把握し、分析し、異変の根本原因を見極め、それを取り除き、必要な援助をしなければならない。

大人たちが、そういう事態を認識し、真剣に立ち向かえば必ず事態は好転するだろう。

<参考文献>

『何故、その子供は腕のない絵を描いたのか。』(藤原智美著・祥伝社)

『滅びゆく思考力』(J・ハーリー著・西村辨作・新美明夫編訳・大修館書店)

『発達障害のこどもたち』(杉山登志郎著・講談社現代新書)

人としての“根”を育てる ～子どもへの大人の責任～

大妻女子大学
教授

岡 健



撮影＝宮原洋一

コトバで人との 関わりは育まれるの？

「入れて～ 入れてでしょ!」

「か～して かしてって言いましょう!」

公園や子育て支援のひろばで、小さな子どもさんを連れてきているお母さん方にとっては、しばしば耳にしたり、あるいは時に自らが自分のお子さんに対して言っていたりすることの多い言葉。

でもこれ…、何も親御さん方に限ったことではなさそうです。保育の現場においても少なからず飛び交っている言葉の様に思われてなりません。

私は仕事上、保育者や教師になろうという若い人たちを教えています。幼稚園教諭や保育士さんは「先生」と呼ばれることが多いですが、では幼稚園や保育園の先生は子どもに何を教える人でしょう?と彼・彼女らに尋ねると、実に多くの人が次のように応えてくれます。

すなわち、小学校以降は勉強を教えるのに対して、保育では人との関わりを教える…、と。

さて、この専門家(あるいは専門家になろうと学んでいる学生)である保育者と保護者の間には、実はある種の共通した考えが横たわっている様に私には思われてなりません。

それは、子どもは小さいのだからうまく人と関わるための方法を知らない。だから例えば「入れて」や「かして」という具体的な“魔法のコトバ”を教える必要がある。言い換えれば、こうしたコトバを教えることがイコール人との関わりを教えることになるのだ、という考えです。

でも…、そうでしょうか?

なるほど「か～して!」というコトバを教えれば、子どもはモノを貸して欲しい時にその「かして」というコトバを使います。でも…、そのコトバが実際に使われる場面の多くは、相手がまさにそのモノを使っている、といった状況であることが決して少なくないのです。すると、多くの場合それはたとえば次のような展開になっていきます。

A:「か～して」

B:「だ～めよ」。

A:「か～して!」(今度はさっきより強く)

B:「だ～めよ!」(Aに呼応するようにやはりさっきより強く)

A:「か～して!!」(もっと強く)

B:「だ～めよ!!」(やはりもっと強く)

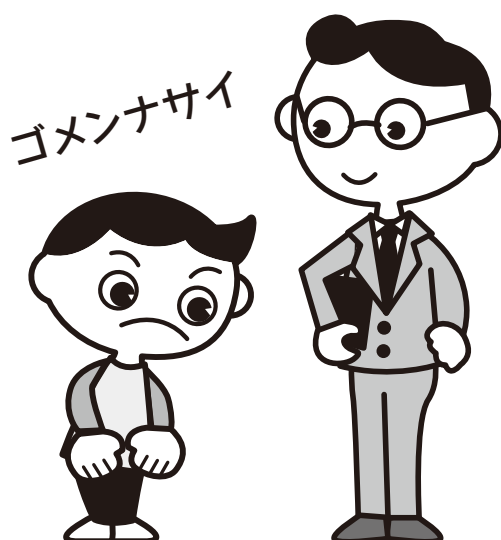
《ボカッ!》

(AがBに向かってと手を出してしまう…)

確かに…、「お子様を、お預かりする」といった妙に肩に力が入る言い回しになってしまった今日では、「お傷を付けずに、お戻しする」ような状況が求められていますから、こうした子ども同士の「やりとり」を耳にすれば、いち早くその現場に駆けつけ、手が出る前に子どもたちを抑止できるといった効果は期待できるのかもしれませんが、また、たたき合いやもみ合い、つかみ合いが奨励される必要がある、と考えている訳でもありません。

ただ…、こうしたやり取りを見ていて、では子どもに人と関わる力は身についているのか、と問えばどうでしょうか。

もちろん誤解して欲しくないのは、「入れて」や「かして」というコトバ自体が問題だ、などと言っている訳ではありません。これらのコトバは便利で、また子どもが育っていく上で必要なコトバだとも思っています。ただ、これを単に記号として暗記させ、それをオウム返しのように言わせることが人との関わりを育てることだと考えるのであれば、それは大きな間違いです。実際、私たちは子どもがもう少し大きくなった時(例えば学童期)、しばしばそのしっぺ返しに合います。



例えばその典型的なコトバ。「ゴメンナサイ」で思い出してみましょう。

大人／「どう思ってるの!」

子ども／「ゴメンナサイ」(ふてくされて)

大人／「何その言い方。ちゃんと謝りなさい!」

子ども／「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ!」

(明らかに反抗的に)

大人／「それで謝ってるつもりなの!! 謝りなさい!!」

子ども／「謝ってるじゃん!!!」

よくありがちな場面だと思いませんか。私たち大人の多くは、こうした場面に遭遇すると子どもが謝っていない、と怒りだします。でも果たしてそうなのでしょう吗? もしこれが国語のテストだと考えたらどうですか?

質問:「悪いことをしてしまいました。相手に対して伝える適切な言葉を括弧内に入れなさい」

答え:「ゴメンナサイ」

そう、こうしてどこにでもありがちな国語のペーパーテスト風に問題を想定すれば、まさに正解に他ならないのです。人と関わる力を育てるには、いったいどうすれば良いのでしょうか。

「ちょうどいい」という感覚の大切さ

さて、私は先ほど人との関わりを育てることとは、「いれて」や「かして」といったコトバを覚えさせ、単に記号として言わせることを強いることではない、と書きました。ただし、実は逆説的なのですが、人との関わりは、やはり最後

は“ことば”なのだとも思います。例えば、他者への要求の場面を考えてみましょう。

「しろよ!」と言うのも、「お願い…して」と頼む時も、あるいは「ねえねえ!これ、こういう風にしたらすごくいいと思うんだけどな」と提案することも…、実は、みんな「してほしい」という気持ちの“ことば”に他なりません。でも、こうした実には様々にある「してほしい」を相手に伝える時、相手が受け止める気になる、そういう“ことば”を用いる必要があるのです。

その場面では…、その相手では…、いったいどう言えば良いのか。どうすれば「ちょうどいいことば」を選べるのか。そのことが大切なのではないのでしょうか。でも、実はこの「ちょうどいい」を選ぶこと。これはそれ程簡単なことではありません。なぜでしょう。

それを一つの例から考えてみましょう。

ある園で、いわゆる「人との関わりの難しい」お子さんと出会ったことがあります。その子は、私たちが訪ねて来たことが嬉しくて仕方ないのに、出てくる「ことば」は「何しに来たんだ!」「お前ら出てけ!」といわゆる“粗暴”で“粗野”な「ことば」でした。むろん私たちも、そうなる可能性が高いことを園長先生から事前に聞いて予想していたので、むしろ「遊びにきました」「是非一緒に遊んでください」と、その子とのやりとりそのものを楽しみながら、彼に仲間に入れてもらい、一緒に遊んでいました。

すると、しばらくしてカエルで遊んでいた彼は、なんとその遊んでいたカエルを握り潰してしまったのです。本当にビックリしたのだと思います。どう受けとめて良いか混乱し、目を泳がせながら、それでも、その時に彼の口から出てきた「ことば」。それは「死んでない。寝てるだけだ」と吐き捨てるような「ことば」でした…。

2歳位の子どもが遊んでいて、思わずオタマジャクシを握り潰してしまうことはそれほど珍しい事ではありません。でも5歳児の子ど

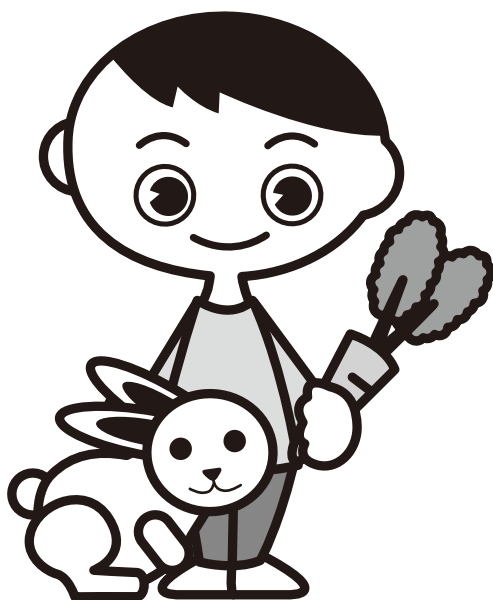
もがカエルを握り潰すことは非常に珍しいことです。

でもそういえば…、3歳児に抱っこされているウサギ。本人はやさしく抱っこしてあげたいと思っているのに、実際には羽交い絞めにしてしまっていたり、ギューッとウサギを握りしめてしまっていたり…。抱っこされているウサギには何とも可哀そうだと思える場面に遭遇することはしばしばあることです。

生き物を、死なないように、逃げないように「ちょうどいい」程度に抱いたり・握ること。さらには壊さないように、潰さないように大切に物に触れること。これら実はそれほど簡単なことではないのです。

この例から考えられること。

それは、適切な「ことば」を選び、人との関わりの“ちょうどいい”関係を築く。実はそのことが非常に身体的で感覚的なものに支えられていることに気がつくのです。では、どうすれば子どもたちにそうした感覚を育んでいくことができるのでしょうか。



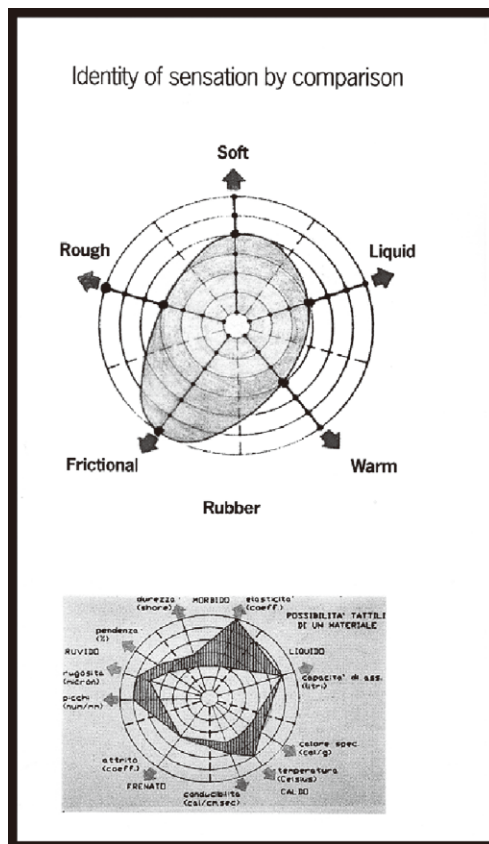
というのも、例えば「ちょうどいい熱さ(冷た

先に述べたような戸外での子どもの好きな遊び。それを擬音語や擬態語に直してみましょう。すると「ザラザラ」「ビチョビチョ」「ベト



ベト」「ギザギザ」「グチュグチュ」「ゴツゴツ」「チクチク」…、こうした単語でその感覚は表現できることに気づきます。しかも、こうして描かれた感覚のほとんどが、実は家庭の中には無いものであることが見えてくるのです。

例えば「ベトベト」。この語が指し示すイメージとして、一番想像しやすい場所やモノは一般的には「腐ったようなもの」でしょう。そして、そうした場所やモノが家庭にあれば、大抵その存在は排除(=掃除)されることとなります。同様に、例えば「ザラザラ」した床。「チクチク」した畳…、いずれも、普通家庭で生活する際には快適さを阻害する要因に他なりません。にもかかわらず、こうした感覚を子どもは求め、多くの保育者はそれを味わうことこそが大切だと思っているのです。



【図2】

子どもは、なぜ一心不乱に土に、水に、砂に、泥に、木に、草に、石に…向き合うのか。それは彼らが遊びの中で、豊かに私たちの世界とつながり(関わり)を持とうと取り組み、自らを育てようとしているからなのだと私には思われてなりません。

“からだを育む”とは…

私の知り合いの保育園の園長先生が、ある時私に次のような話をされました。

「岡さん、私は給食という言葉が大嫌いなんだよ。だって時間によって準備され、運ばれてきたものを時間に合わせて食べる。管理されて食べる。そんなのは食事ではない。それは“エサ”っていうんだ」と。

「給食」という言葉が適切な言葉であるのかどうか。そのことの是非はさておいて、この園長先生の発言は私にはとても刺激的なものでした。というのも、先の『環境構成論』には、「臭覚」という章もあり、そこには「匂い／臭いは、人間にとってより原初的なものである」と書かれてありました。実際、自分が幼かった折も、お腹が減ったと実感するのは、時計の針が何時を指すかではなく、匂いや音、雰囲気の中で空腹感を覚え始め、だからこそ遊びを切り上げ帰宅し、食卓につくことを決めていたことを思い出したからです。

子どもたちは「匂い／臭い」に敏感です。笑い話のようですが、例えば落ちていたタオルを拾って「これ誰の?」と聞けば、タオルを自らの鼻にあて、「○○ちゃんの」と教えてくれることは決して珍しいことではありません。

私たち大人ですら、食事の残りを冷凍庫で凍らせて、でもいつ作ったのかを忘れてしまった時にどうしているでしょうか。解凍した

その食品が食べられるかどうか、まずは「匂い／臭い」を嗅いではいないでしょうか。

矢野智司は『子どもという思想』の中で、“からだ”は「意味受容器官」であるだけでなく、「意味生成器官」であることを指摘しています。わかり易く述べれば、物事を考える（意味をつくりだす）のは頭なのであって、“からだ”はその頭の働きを含め、生命の維持をするためのもの（意味受容器官）なのだ、と考える考え方とでも言うておけばよいでしょう。

でも、それでは例えば不登校の子どもの状態を説明することはできません。何故ならば、彼らは頭では学校に行かなければならない、行きたいと本当に思っている。にもかかわらず、実際に行こうとすると熱が出たり、吐き気をもよおしたり、腹痛になってしまうのです。つまり頭で考えていることとは別に（意識していることとは別に），“からだ”は意味をつくりだしていることを矢野は指摘したのです。

人との関わる力の脆弱さが指摘されて久しい世の中です。「生きる力」の育成は幼稚園要領や保育所保育指針、そして学習指導要領の今回の改定においても、変わらず重要な事項として今の教育や保育の課題となっています。

にもかかわらず、一方では子どもが戸外で泥だらけになって遊ぶ事を忌避し、子どもの生活を丸ごと抱える保育所においてですら食事の外部搬入を認め匂いと食べ物を同時に、しかも時間管理の中で提供できるようにすらなっています。

そして…、ついには生活臭を悪臭と決め込み「匂い／臭い」を消し去ろうとする。そうした社会状況が、今日の子どもを取り巻く状況であることを私たちは強く認識する必要があるでしょう。

“からだを育むこと”。それは、体力測定に表わされるようなものだけを指すのではないことは明らかです。人が人として育まれるため

に、今改めて“からだを育む”ことの意味を考えること。“世界に開かれた敏感なからだを育むこと”。そのことへの子どもへの責任が、今、私たち大人には問われているのだと私は思っています。

<参考文献>

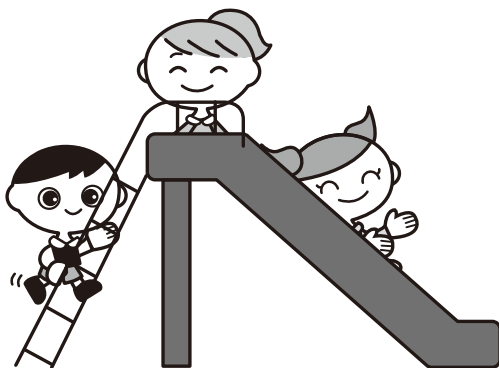
矢野智司、子どもという思想、玉川大学出版部(1995)

【図1】

Reggio Children, children, spaces, relations; metaproject for an environment for young children (1998)

【図2】

Reggio Children, children, spaces, relations; metaproject for an environment for young children (1998)



■執筆者紹介

正司 昌子 今、「普通の子供達が危ない」～子供達におこっている異変～

レクタス教育研究所 理事長。1933年兵庫県生まれ。1956年大阪音楽大学短期大学卒業
金澤ピアノ塾講師。1987年0歳から小学入学までの全人格的教育・能力開発を目指しレクタス教育研究所を設立。執筆、講演会活動などで幼児教育の必要性を訴えている。

主な著書に「あせらないでお母さん」(二見書房)、「正司式 ぐんぐん伸びる書くちから」(小学館)、「授乳児のケータイで子供は壊れる」(ベスト新書)、「幼児の知能をぐんぐん伸ばす本」(PHP研究所)、「「幸せな女の子」を育てる母親講座」(PHP研究所)など多数。

岡 健 人としての“根”を育てる～子どもへの大人の責任～

大妻女子大学教授。日本保育学会理事。研究関心は、園内研修法に関する研究、保育方法(環境構成論、遊び論、談話分析等)に関する研究、子育て・子育て支援に関する研究など。他に、次世代育成行動計画策定やその後の評価・進捗管理、あるいは子どもの権利条例策定や公立保育園民営化等の行政との協働。地域での『冒険遊び場』活動や子育て支援活動の実施等々、保育や子どもに関する制度や施策、さらには「子育て支援」事業に絡む様々な課題にも関心を寄せ活動している。

■協力園

のぞみ幼稚園(東京都 足立区)

■「健康教育」あらまし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育[®]」。
1956年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。
読者対象/日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の学校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育[®]」をご愛読頂きまして、誠にありがとうございます。
編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にして頂ければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介(例:当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等)、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非お聞かせください。
なお、お問い合わせは下記の連絡先までお願い致します。

お問い合わせ・ご連絡先

河合薬業株式会社 「健康教育[®]」編集部

〒164-0001 東京都中野区中野6丁目3番5号

TEL:03-3365-1156(代) FAX:03-3365-1180

E-mailアドレス: genkikko@kawai-kanyu.co.jp

ホームページアドレス: <http://www.kawai-kanyu.co.jp>

「かん・ゆ」って、なんだろう。



それは「元気っ子ビタミン」。



ビタミンC肝油ドロップ

ビタミンA・D・Cが
入っています。



カルシウム肝油ドロップ

ビタミンA・D・カルシウムが
入っています。